

## 博報財団 第13回「博報日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	山本 直樹 (ヤマモト ナオキ)
在住国名	アメリカ合衆国
所属・役職	カリフォルニア大学サンタバーバラ学校映画・メディア学部助教授
招聘回(招聘研究期間)	第13回(2018年9月1日～2019年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	京都学派と日本の視聴覚メディア理論史との相関関係
研究目的	西田幾多郎を中心とする京都学派の哲学が日本の映画・メディア理論史に与えた影響を考察することにより、西洋発祥の言説のみを「理論」として受け入れてきた人文科学一般の批判をめざす
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>一次資料の収集:</b> 京都学派の影響下にある批評家による論文は、ほとんど英語圏で紹介されておらず、中井正一、戸坂潤、木村素衛、長江道太郎らが書き残した文章を早稲田大学中央図書館や演劇博物館、国会図書館などで調査、収集した。</li> <li>● <b>専門家との意見交換:</b> 京都学派の哲学および日本の映画・メディア理論を研究する専門家に意見を仰いだ。具体的に名前をあげると、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ、出口康夫、斎藤綾子、アーロン・ジェロー、マーク・ノーネスの各氏である。</li> <li>● <b>戦後文学・メディア論の調査:</b> 早稲田大学日本文学専攻の博士後期課程の授業に積極的に参加し、担当教授である鳥羽耕史、十重田裕一、高橋敏夫、宗方和重の各氏ならびに院生との活発な議論を通じて、戦後文学およびメディア理論に関する知見を高めた。</li> </ul>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>京都学派へのメディア論的アプローチ:</b> 戦前・戦時期に書かれたテキストを丁寧に読み解くことにより、京都学派とメディア理論と親和性という、新たな視点が浮かび上がった。とくに長江道太郎の仕事は、西田哲学を「映画」という二〇世紀メディアの経験に照らし合わせて読み解くものであり、西田の形而上学立場を「再歴史化」するための契機を与えてくれる。</li> <li>● <b>哲学および映画理論史の書き換え:</b> 京都とドイツの哲学者たちが一九二〇年代から三〇年代にかけて行なった直接的な交流を丹念におってゆくことで、二〇世紀哲学史そのものに「日本」を書き込むことの重要性を再確認した。この点はとくに、映画理論における「現象学的アプローチ」の出現を戦後フランスに措定してきた、これまでの映画理論史を書き換えるための有効な参照項となる。</li> <li>● <b>戦前と戦後の連続性:</b> 研究の前半で培った知識をもとに戦後日本の批評言説を読み直すことで、これまでほとんど顧みられなかった連続性を見出すことができた。より具体的にいえば、花田清輝、埴谷雄高、松本俊夫、松田政男など、戦後の前衛芸術および映画・メディア理論の核をなす批評家たちの仕事を、京都学派に対する批判的応答として読む視点の導入である。</li> </ul>	
<p>3. 研究成果(予定を含む)</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <i>Dialectics without Synthesis: Realism and Japanese Film Theory in a Global Framework</i> (University of California Press, 2020): 本研究のより大きな枠組をなす「日本の映画理論」に関する単著。京都学派と長江道太郎の関係については、第五章 “Neglected Traditions of Bergsonism and Phenomenology” で詳しく論じられて</li> </ul>	

いる。

- 「転形期としての一九五〇年代」(『転形期のメディアロジー』森話社、2019年、序文): 鳥羽氏と私が共同で編集した五〇年代日本におけるメディア実践と理論化に関する論文集の序文にあたるもので、花田清輝が京都学派の哲学の批判的読解を通じて発展させた「楕円幻想」という概念を扱っている。
- 「暗箱からの透視——埴谷雄高の存在論的映画論について」(同上、第四章): 花田と長年のライバル関係にあった埴谷による映画論に関する画期的な論文で、埴谷文学のベースをなす「自同律の不快」を、京都学派の哲学およびメディア論の視点から論じたもの。
- 「戦後日本におけるローサ受容——花田清輝の「シュルドキュメンタリー」について」(森田のりこ編『現実の創造的劇化再考』、山形国際ドキュメンタリー映画祭カタログ、2019年): こちらは花田による前衛記録映画論を、西田が戦前に提唱した「絶対弁証法」に対する反論として分析している。

○口頭発表(題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略(200字以内))

- “Negation of the Negation: Tracking Documentary Theory in Japan,” Kyoto Asian Studies Group, 2018年11月5日、同志社大学: 上記「戦後日本におけるローサ受容——花田清輝の「シュルドキュメンタリー」について」をベースにした発表。
- “Form, Expression, Cinema: The Kyoto School of Philosophy and Wartime Japanese Film Theory,” Transcultural Cinema Forum, 2018年11月6日、京都大学: 上記 “Neglected Traditions of Bergsonism and Phenomenology” をベースにした発表。
- “Film Theory at Its Protean Origin: Pragmatism, Lebensphilosophie, and Gonda Yasunosuke,” Uncanny Histories, 2019年2月22日、UCSB: 本邦最初期の映画理論書である権田保之助『活動写真の原理と応用』(1914年)を例に、彼の理論がアンリ・ベルグソンとプラグマティズムから、いかなるインスピレーションを受けていたかを論じる。
- 「戦後日本と映画理論: 埴谷雄高の〈存在論的〉映画論について」、「東アジアの人文知」、2019年7月6日、早稲田大学: 上記「暗箱からの透視——埴谷雄高の存在論的映画論について」をベースにした発表。
- 「止揚なき弁証法——グローバルな枠組みにおけるリアリズムと日本映画理論」、千野拓政教授大学院セミナー、2019年7月16日、早稲田大学: 上記 *Dialectics without Synthesis: Realism and Japanese Film Theory in a Global Framework* をベースにした発表。

○その他の活動

- 早稲田大学日本文学専攻の博士後期課程の授業への参加
- 日本映画研究会(オーガナイザー: 阿部久留美、明治学院大学大学院生)への参加

4. 今後の活動予定

- 今回の研究滞在をもとにして執筆した2冊の本(論文集&単著)が2019年9月と2020年4月にそれぞれ刊行予定なので、これらのプロモーション活動を、Society of Cinema & Media Studiesの年次会議やその他の学会において精力的に行う。
- 今回の研究を通じて導き出された「日本のポストモダン再考」というテーマを扱う、次の単著執筆のための調査の開始